

富岡製糸場や日本各地にシルク製糸場が創設されたことで、効率よく、高品質の繭を加工することが可能になった。シルクの生産は各地の繭の数によって妨げられた。繭は年に一度だけ収穫され、収率はまだ不安定であった。蚕は特に病気に弱く、大規模な養蚕農場で病気が発生した場合、すべての蚕を一度に失う危険性が高かった。蚕がどのように飼育されたかによりシルクの品質は大幅に変化し、全体的に不安定な産業だった。2つの養蚕学校が、カイコの飼育のための新しい技術を奨励し、新世代のカイコ農家の教育に役立て、絹の生産を明治産業時代の最前線へと変えた。高山社と競進社は、暑さと換気の正しい組み合わせがカイコを急速に成熟させる可能性があることを発見した兄弟によって設立された。彼らが始めた学校は両方とも何千人もの学生を教育し、日本中で繭生産の大幅な増加を生み出した。